

## 国内研修報告書

私はボランティアサークルごまちゃんの一員として、8月31日から9月2日までの3日間、秋田県藤里町で傾聴ボランティアや地域住民との交流を主とした様々な活動を行った。藤里町は、人口3375人、面積282km<sup>2</sup>で秋田県の北部に位置している小さな町で、高齢化率は44.9%と非常に高くなっている。社会福祉協議会と地域住民の結びつきがとても強いことが大きな特徴であると感じる。また、社会福祉協議会では引きこもり支援に力を入れている。ボランティアサークルごまちゃんは年に2回、夏と冬に藤里町を訪問している。その活動は今年で11年目であり、藤里町におけるごまちゃんの知名度も高くなってきており、秋田県の新聞や、藤里町社会福祉協議会のホームページに取り上げられることも多くなってきている。そのせいもあり、「今年もごまちゃんが来るの楽しみにしてたのよ」と地域住民の方に言っていただける機会も増えたように思う。藤里町にとって、ごまちゃんの訪問は一種の恒例行事になっているのだ。また、初めて藤里町を訪れた時は大学1年生だった私も大学4年生となり、今回の訪問は4回目の訪問となった。3年間継続して藤里町に関わる中で、良いことだけを見てきたわけではなく、悲しい出来事に出会う機会もあった。本報告書ではその中で気付いた藤里町やそこに住んでいる地域住民の変化を主に述べたいと思う。

### 1. 少子高齢化の進行

藤里町は高齢化が進んでおり、高齢化率は44.9%だそうだ(2015年7月時点)。私をはじめ藤里町を訪問するにあたって高齢化率を調べたところ、39.7%(2012年2月)という結果であった。数字で見るだけでなく、実際の藤里町に滞在している際にも、少子高齢化の進行を実感する体験をした。藤里町には「藤琴駒踊り」という伝統的なお祭りがある。若者が神輿を担ぎ、「駒踊り」という踊りを踊るもので、今年は9月12日に行われたため、私たちは参加することはできなかったが、夜になると駒踊りの練習をする音が聞こえてきた。しかし、現在では藤里町にいる若者だけでは人数が足りず、神輿を担ぐことができないため、二ツ井という近隣の町の高校生にアルバイト代を払い、神輿を担ぎに来てもらっているそうだ。このようなことから、少子高齢化が進んでいることがうかがえた。少子化の進行を防ぐことを目的とし、藤里町では少子化の主たる原因となっている未婚化、晩婚化に対応するために、NPOや他の市区町村とも連携しながら、独身の男女を対象とする結婚支援イベントなども行っているそうだ。今回の訪問では詳しい話を聞くことができなかったため、冬に訪問した際に詳しく話を伺いたいと考えた。

### 2. 新たなイベントに関して

私が今回の訪問で一番印象に残っていることは「FujisatoREC」というイベントだ。

「FujisatoREC」は世界自然遺産白神山地の麓、秋田県藤里町で行われる映像プロジェクトである。2016年は、藤里町を訪れた人が撮影した映像を投稿できるウェブサイトを開設し、映像コンペティションを実施しているそうだ。また、雄大なブナの森に抱かれた環境を活かした特設キャンプサイトで普段はできない新たなキャンプ体験をすることもできる。キャンプ企画も実施するほか、アーティスト4組を招待し映像を上映する野外上映会や公開審査会のイベントも行われるそうだ。また、グランプリの景品として、藤里町内にある空き家の使用权が用意されている。

私はこのようはイベントが藤里町で行われていると聞いて純粋に驚いた。今まで私は藤里町は「高齢者の住みやすい町」というイメージが強く、映像コンペティションやキャンプ体験など若者の好みそうなイベントが行われるというイメージが全くなかったのだ。しかも、今回は開催にあたって、東京にある他の大学と連携もしているという。私は藤里町の少子高齢化の原因として若者が住みにくいという点も大きいのではないかと考えていた。高齢者にとってとても住みやすい町であるということはその反面、若者にとっては住みにくい、楽しくない町なのではないかということである。実際、藤里町に住んでいる子供はほとんどの場合、高校進学か大学進学を機に町を出ることが多いそうだ。藤里町から通える範囲に大学がないということが一番大きな原因であるが、就職するとしても若者の雇用が少ないというのも原因の一つであろう。このようにして、町外、県外に若者が出て行ってしまっており、少子化が進んでいっているように思えた。しかし、このような若者向けのイベントを企画、実行することで、少しでも若者が藤里町に戻ってくる、流入してくるきっかけになればと思う。直接的なきっかけにはならないとして、このような若者向けのイベントを通じて若者のニーズを把握していったり、最終的には若者の雇用の場なども増やしていくことができれば、藤里町は若者にとっても住みやすい町になっていくのではと考えた。また、グランプリの景品を「藤里町にある空き家の使用权」としていることから若者の流入を考えているのではないかと感じた。少なくとも地域住民を対象としていない時点で、これまでの藤里町とは少し違う気がする。これまでやや閉鎖的ではないかと感じていたが、今後は外部の若者たちとも積極的に関わっていくのだろう。空き家の使用权は2年間ということだが、2年間あれば藤里町の魅力を実感するには充分であろう。このようにして、藤里町が外部に開かれた町になってくることを考えるとワクワクすらしてくる。多くの外部、特に都市で生活している若者たちが藤里町の魅力に気づいてくれることを心から願う。

### 3.地域住民の変化

4回目の訪問ということもあり、顔見知りの住人も増えてきた。多くの住人は前回の訪問から変わらず、元気な姿を見せてくれたが、やはり、認知症が進行してしまった方や身体の機能が衰えてしまった方、残念ながらお亡くなりになられた方もいた。認知症の進行された方は、今までは一度聞いた私たちの名前を忘れなかったのに、今回は名乗ってもすぐ

に忘れてしまい、それに自分でも気づいているようだった。「ごめんなさい、私、最近すぐに聞いたこと忘れちゃうの」と言われ、どう反応してよいのかわからず、曖昧な返答をしてしまったことを反省したい。それでも、その方はまわりの住人や利用者、社協の方に支えられ、デイサービスでは楽しそうに振舞っていた。また、私が一年生の頃、元気にお喋りしてくれていた方が亡くなったという報告は言葉で言い表せないほど悲しく、どうにもならないことだとは言え、遣る瀬無さを感じた。しかし、これも町の自然の変化であると考えた。亡くなられた方のご友人も、「〇〇〇〇さんは幸せだったよ」などと言っておられ、私も将来自分が死んだ後そのようにまわりから言ってもらえるような生き方をしたいとも考えた。

このように、継続して関わる中で、楽しいことだけではなく、悲しいこともある。しかし、それらを全て含め、町の変化を見て、多くのことを学んでこれたと感じた。私はこれから大学を卒業し、社会人になるが、それでも今後も末長く、この町と関わっていきたいと感じた。また、ごまちゃんの中でもより多くの後輩が藤里町に訪れ、そこで何か学んできてほしいとも考えた。これからも、20年、30年と関わっていく中で、藤里町とごまちゃん、法政大学の結びつきがより強固になっていけば、お互いのためになると感じる。是非ともそうなってほしいと願う。

そう思わせてくれた藤里町や関係者の方に感謝を述べたいと思う。